



北急HD傘下の各社は海外支社を持っている。

それは単体の北急電鉄もおなじで、特に海外観光客の誘致のために南米にまで駐在所を持って、「日本での旅は北急の日本一周周遊列車・ブラウンコーストエクスプレス（BCE）で」と官公庁や法人に営業をかけたたりもする。

今は国際化が進み、BCEも運行開始時に想定されたように、多くの外国人客が乗る。

彼らも日本だけでなく、日本を走る鉄道にも興味を持ってきて、来嶋の運転するBCEの先頭、機関車EH510にまでやってきてヘッドマークとともに写真に収まろうとする。

そのとき、来嶋はいつもながら、なれるという以上にうれしくなる。

その成田空港駅に作られた特別ホームから発車するBCEに乗務するのは、北急周遊列車事業部と運転士の中でも甲組と呼ばれるトップクラス運転士の荣誉である。

その成田空港駅の北急乗務員詰所で、来嶋は乗務の準備を進めていた。

そのとき、流しっぱなしのテレビに「南米で地震発生、マグニチュードは6.7。津波の危険はありません」との速報が流れた。

「マグニチュードってわかりにくいですよ、普通の人には」

「ああ。あれは対数だからな」

「どれぐらいの被害なんでしょうね」

と話し合っているとき、来嶋は電話を受けていた助役に呼ばれた。

「申し訳ないが、樋田社長とともにすぐに南米へ飛んでくれ」

「ええっ！」

「樋田社長の直々のご指名だよ」

「でも、なんで」

「さすがうちの社長だよ。南米駐在の駐在員が地震の関係か、行方不明と判明した。外務省から連絡が正式にくる前にその情報をつかんだという。

社長はすぐにヘリでこっちに来て、ブリーフィング受けてる。でも、随行するのは君しかないな」と

「なんで僕が？ よりによって、これから乗務ですよ」

「もっと大事なことだそうさ。特に運転士として」

来嶋は考え込んだ。

「せっかく気持ち作って乗務にのぞんでいるところすまないが、だつてさ」

そのときだった。

「来嶋、わかってるな。判断は素早く、初動は全力で」

甲組の指導運転士・梅沢さんがいたのだ。

「わかりました」

梅沢さんの言葉は絶対だ。

来嶋はそう答え、覚悟した。

「身一つでいいってさ。靴下から帽子まで全部社長が持ってくれるって」

来嶋はただならぬこの樋田社長の対応に、戸惑うというより、頭いっぱい警報が鳴るような思いをしていた。

樋田社長の用意した飛行機の席はビジネスクラスだった。

「乗り継ぎが何度かあるが、なんでも必要なものはいってくれ。本当にすまないが、絶対に君を彼のところへ連れて行きたかったんだ」

客室乗務員が「アーミングレバーをオートにしてください」のいつもの放送とともに、飛行機の不時着時の脱出用膨張シュートのモードが切り替わる。これで飛行機はこのレバーをマニュアルに戻して正常に着陸するか、不時着するかのどちらかになる。

空の旅というが、列車の旅に比べると独特の緊張がある。

「聞き忘れていたけど、飛行機は苦手か」

「いえ、そういうわけじゃないんですが、ビジネスクラスは初めてで」

「そうか。贅沢に思えるかもしれないが、ついた向こうではさんざん働くことになるから。楽しい行楽のグアム行きとかだったらいいんだが、あいにく部下の被災状況の確認じゃきつくて」

「ファーストじゃないんですね」

「そりゃ、経費節減もしなくちゃいけないから。社長業も案外大変なんだよ」

「いえ、案外だなんて」

来嶋は恐縮した。

「私は鉄道会社の社長になるなんて思いもしなかった。でも、鉄道員の姿に、独特の興味と敬意を持った。そして北急の経営権をとった。

話は長くなるが、南米の彼は、その北急に私が来る前からの仲なんだ」

社長はのど骨の奥にしみて痛む心配をぶら下げているような表情だった。

飛行機は離陸した。

「とある会社との提携関係を結ぶときだった」

樋田は話し始めた。

私は自分がハゲタカ、非情な乗っ取り屋とマスコミに非難されていることで苦しんでいた。

しかし仕事はおもしろかった。経営者にタフネスがなくなって沈んだ会社に新たなガッツのある経営者を入れると、おもしろいように社員たちが工夫や創意を見せ、楽しそうに働きはじめののを何度も見てきた。

ノルマやマーケティングに振り舞わされる経営者とは何度も対決した。

そんなものでできるほど経営は甘くない。つまり彼らは無能な奴らだった。

だが、彼らは無能にもかかわらず職にしがみついたため、私に虚像をまとわせ、マスコミを味方

にしようとした。

マスコミにもいろいろある。イエローペーパーのようなものもあるし、なかには総会屋の発行する「自称の業界紙」なんてのものもあった。

懐かしい怪文書も今でも北急（うち）の総務課に届くしね。

「初耳です」

「みんなシュレッダー行きだから。君たちには全く関係ないことだし」

そんなときであったのが川辺だった。

彼と出会ったのは大昔、DRAMメーカーののっとり計画が始まったときの新年会だった。

当時、電子立国日本と呼ばれていたが、その実、メーカーは下請けを容赦なく高圧的に値引きさせ疲弊に導き、彼らの利益も生存も、誇りさえも奪った。

それで何が電子立国だ。

その大手メーカーの横暴への悲鳴を聞き、そしてその時同時に海外メーカーがよい条件を出していた。

私は、「売国奴」といわれてもと、かれら下請けと海外メーカーを結びつけるつもりだった。

どっちみち、まともなモノ作りを忘れ、下請けいじめの値引き交渉と宣伝ばかりの日本メーカーの空洞化は進んでいたし、私がやらなくても、誰かが技術の海外流出をさせるのが進むのは必至だった。

馬鹿な役所はそれでも国内メーカーの肩を持ち、下請けの悲鳴を「国際競争力のために」と無視し、エンジニアたちの過労を労基署までもが目をつぶっていた。

事実何人も過労死が出ていた。これでは奴隷労働だ。

私はそんななか、その地方随一のホテルのバンケットでの工場関係者の賀詞交換会の壇上で、世界を支える技術と信頼の我が社、という馬鹿なメーカー経営者に、その場で殴りかかりたかった。

でもそれをこらえ、笑顔でファンドの人間として「ごひいき」に、と賀詞交換をした。

内心、みんな地獄へ行け、と思いながら。

彼らも、「あなたがたは怖いですよ。正直。冷徹な豪腕にはかないませんからなあ」などとちょっと酒が入った恵比寿顔で笑っていた。

内心、胸が破けそうだった。

そのとき、とある銀行の支店長がやってきた。

それが、川辺だった。

「えっ、海外事業部の川辺さんって、もと銀行の支店長だったんですか」

「ああ。そのときはね」

そして、私は川辺とも笑顔で賀詞交換し、離れるつもりだった。

ところがだった。

「私には正直、耐えられそうにないですよ」

川辺は突然、弱みを見せた。

「牙のない獣といっても、金も信頼も、鋭い牙にも、優しいタオルケットにもなるものですが、学べば学ぶほど、迷いも苦しきも深くなる」

「文学ですか」

私は興味を持ったけれど、それ以上に彼の純真な色の瞳に胸が静まったことに驚いた。

「いえいえ、私も経済学ですが、しかし文学にもまた経済が裏打ちしていることがあります」

「それはあるでしょうね」

「で、ここではいいにくいことがおありでしょう。そろそろ皆ははけますから、この上のバーでちょっと一杯いかがです？」

川辺のその声に、私は救いを求めようとしたんだ。

「敏感であるという事はいい事もある。

鈍感である事よりも優しくあれる事でもある」

水割りをなめながら、彼は語った。

「しかし、豊かな感受性を持つということは、胸のねじ切れるような悲しきと辛きをつねに伴う

。何かを感じたり、気にしたりすることは、その対象に自分と同じ相似した要素があるから。善し悪しにかかわらず、この感受の対称性は存在する。

これはとある小説で読んだ台詞ですけどね」

「なるほど」

夜を見下ろしながら、私は公衆電話で遅くなると妻に連絡していたのを思っていた。

当時は今ほど携帯電話は進化していなかった。ショルダーホンの時代だった。

「そして嫌悪は常に近親憎悪である。

嫌悪した時点ですら、自分の中に呼応する嫌悪すべきその要素があるのだ。

本当に悪しきものと訣別するためには、悪しきものを悪しきものと認識し、その上で無視することである」

「無視、ですか」

私は胸のとげを感じた。

「なかなかそこまで達観はできません。正直」

「そうですね。私もそうです。だから今の銀行でもうだつが上がらない」

「とはいえ」

「学閥政治に嫌気がさして、地方の支店に飛ばされて。そうしたら偶然あの工場ができたんです

。運命なんてそんなもんです」

私は察した。

彼も、この地域の悲鳴を聞いているのだ。

「それで、ついこういう風に手帳に書き写して、読み返しているんです」

彼は笑った。

「どうしようもないものを凝視し、それを仲間とし、愛することは、ありえない。

どうしようもないものはどうしようもないから、無視するしかない。

そして、悪しきものに影響されそうな者がいたら、その彼がその悪しきものに共感を覚える存在であれば、きっと遅かれ早かれ必ず影響されるだろう。

その相手は、根底に悪しきものを持っているのだから、どう取り繕っても、いつか必ず残酷に裏切るのだ。

悪しきものに過剰に反応するものは、その自らの内面に呼応する悪があり、絶対に真の仲間とは成り得ないのだ。

悪しきものを憎み、良しきものを、良き関係をつくろうという仲間は、そんな悪しきものに影響されず、本質を見抜き、本質で共感しあう。

それだけが真の仲間である」

私は彼の読み口が、胸にしみた。

「悪しきまがい物に心動かされてはならない。

そして、自らも絶対に悪しきまがい物になってはならないのだ。

真であれば、まがい物は必死にそれを同じまがい物にしようとするだろう。

でも真なるものは、まがい物の荒野にあっても、決して曇らないし、またいずれ同じ曇らぬ真なるものに出会うのだ。

感受性に振り回されてはいけない。

まがい物同士の争いからは、そっと離れよ。

その外の大きな湖に、真なるものは常に静かに存在し、待っている」

私はそのとき、心がとても静かに、澄み渡るのを感じた。

「あなたも、常に真なるものであれ」

「いい話ですね」

「つまらないことですが、私もいい話と思って。

実情はあなたもご存じでしょう。

私は、あなたと対立するかもしれない。

いや、そうなるでしょう。

あの工場のメーカーにつく、買収への防御側のメインバンクの者として。

それが、つらい」

私はわかってはいたけれど、それでもつらかった。

「そのときが近づいていることは、当行でも調査部が察しています」

「まずいじゃないですか！」

「いえ、いいんですよ。

この手帳のページを聞いてくれる人とは、争うべきではないと思っています」

「でも」

「私はこのことで難詰され、結局馘首されるでしょう。

それでも、私は真でありたい。

残す部下や取引先が心配でも、

中途半端では、あの馬鹿なメーカー経営陣を太らせるだけだ。

それは真ではない」

彼は覚悟を決めた口調だった。

「私も、なにか覚悟ができた気がします。

まるで、これまでの苦しみを供養できたような」

「嬉しいことです」

川辺は慎み深く、そう口にした。

二人はそうして飲み、樋田はそのホテルに投宿し、川辺は帰っていった。

そして。

川辺は銀行をやめた。

樋田は何度も連絡を取ったが、川辺はもう金融はたくさんだと嘆いていた。

金に金を貸しているだけ、レバレッジにもならない膨張。まさにバブルと断じていた。

樋田と川辺は、そのころ始まったインターネットでのメールのやり取りを続けた。

そして、樋田が北急の経営権を手に入れた。

「ぱぱのでんしゃ」と息子がせがむので買ってやったプラレール。

息子へのサービスで家族旅行で自分の北急の特急列車に乗ってそこからNゲージへと興味が走った。

そしてそのあとに、事業調査に出かけたときの、テールライトの輝きを引いて黄金の夕暮れにさってく列車の後ろ姿に、樋田は惚れ、鉄道趣味におちたのだ。

その鉄道に目覚めた日、樋田は川辺が鉄道ファンであることを知った。

川辺は駅の飲み物の自動販売機のメンテの人間でもいいから、少しでも鉄道に近い仕事をしたかったんだと打ち明けた。

そして今、銀行をやめて地方のデベロッパー系大型スーパーで働いているという。

「上も下も十分な人間だ。やめても大丈夫だ」

一にも二にも、川辺は北急で働きたいと熱心に訴えた。

それで、樋田は北急に川辺を中途採用したのだ。

それから、密かに北急内でメールをやり取りした。

メールに鉄道の写真のデータを添付して、時にはこっそり鉄道撮影旅行にも出かけた。

そして川辺はポルトガル語が得意だった。

それを活かすため、今、南米へ出張しているのだった。

それを来嶋は聞いて、納得した。

「そういうご関係だったんですね」

「ああ。本当、例のマンガみたいだが、心の友だった。

それが」

樋田は飛行機の速度がもどかしらしく、今にも翼を自分につけてより速く彼地へ飛びたいような勢いだった。

「無事だといいですね」

「ああ。本当にそうだ」

途中で2回、飛行機を乗り変えた。成田からも羽田からも直行便のない土地なのだ。

そしてそのかの地の空港に降りると、ようやく外務省、大使館から連絡が入った。

「『外務省なんか民営化してしまえ』って大学の恩師が吠えてたよ」と樋田は吐き捨てた。

被災地への立ち入りの手続きを大使館で行った。

すると、川辺は南米の重工メーカーとの交渉を米田重工の者と一緒に行くということで入国したらしい。

ボロボロのアメ車をドライバーごとチャーターし、被災地近くの被災者キャンプへ向かった。

国際即応救難隊の用意したテントが、ひとつの街を作っていた。

ドライバーが川辺のことを調べてくれた。

川辺はこの南米で、北急とBCEの宣伝営業と共に、この地に日本文化を紹介し、友好を図っていた。

そのなかで川辺が企画し、もうすぐ第一回が行われるところだったのが、「BCEでの修学旅行プレゼント」だった。

この地の成績優秀な子供を日本に招き、BCEで日本をクルーズしながら、日本を学び、親しんでもらおうというのだ。

その当選者は、教会の孤児院の孤児であることがわかった。

その子は孤児ながら、この地での誉れも高く、末は博士か大臣かという話であったが学費が苦しく、そこで川辺はそれも支援するつもりだったという。

そして、その話をしに、市内に向かって、被災した。それが経緯らしい。

通じない言葉がもどかしかったが、ドライバーもちょっと上積みして払った以上に熱心に案内

してくれた。

そして、市内に入る許可が出た。

車は軍や国際救助隊の車列とともに、南米ワイン用のぶどう畑を突っ切る道を走った。

途中でなんども被災地から脱出する車とすれ違った。

そして、時折、余震があり、そのたびに車列は安全のために停止した。

市内に入った。

ドライバーが「塔が！」と嘆いた。

この街の中心の石造りの教会が遠目にみえたのだ。

この教会が、川辺の向かった孤児院のある教会らしい。

歴史の古い、そしてこの地方の信仰を集める、大事なものだったようで、ドライバーはハンドルを叩いて嘆いていた。

立ち尽くすしかないほど、市街は傷んでいた。

ガラスは割れ、壁は崩れ、倒壊して道をふさぐ建物の瓦礫を避けるのも大変な状態だった。

あちこちで倒壊建物の生き埋めを救助すべく、救難犬や救難ロボットを使った救出作業が行われていた。

そして、教会にようやくたどり着いた。

孤児院の建物は半壊で、なんとか子供たちは脱出できたが、教会の聖堂と塔はほぼ完全に崩壊していた。

言葉もなく、樋田と来嶋は安心して瓦礫の山を見つめた。

そして、樋田は見つけてしまった。

手帳だった。

あの、銀行の手帳だった。

樋田は泣き崩れた。

「何故だ！ なぜ川辺が！」

ただならぬ泣き方だった。

それだけ親交が厚かったのだろう。

冷徹な金融、それも乗っ取り屋のはずだった樋田が、ここまで感情を見せるのに、来嶋も涙した。

現業部門に顔を出すことが余り無い川辺だったが、それでも来嶋は涙した。

現業だけじゃない。こういった事業部の間人も、また北急の一家の一員なのだ。

運転していて、いかに鉄道が多くの人間に支えられているかを感じていた。

線路の保線、架線の電力区、車輛の整備をする検車区と工場、駅務、信号区と指令所だけでなく、その背後で支えてくれている総務や事業部。

そのすべてが調和し、そしてBCEや最近就役したNFEといった取り組みもできるのだ。

その一つが、欠けた。

樋田の苦しみが、来嶋にも迫った。

救出隊もまた、それにもらい泣きするほどだった。

そして、その中にテンガロンハットを被った日本人がいて、また泣いていた。

それに気づいた樋田が、叫んだ。

「川辺！」

ええええっ！

「無事だったのか！」

「えっ、誰か別のやつに泣いているのかと思った」

「別のやつはいない！」

川辺は戸惑っていた。

「飯食いに行つて、そこにドカンと地震が来たんだ。

すぐに子供たちの確認とか、いろいろあってバタバタしてて」

「この手帳は？」

「治安が悪いから、いつのまにかスリにさられてたんだと思う。

同じ言葉を毎年書き写してるし、あんなくそメーカーにつながったクソ銀行の手帳なんか厄落としだと思っていたよ。

教会も我々日本資本の事業で改築中で、被害者はない。

だが、街はあちこちで大変なことになっている。

皆が心配だ。

こんなときに、日本では政変だなんて」

「情けないな」

「滅びる国は、この被災国ではなく、立ちながら腐る日本だ。

天変地異は悪政の時に、最も悪政から遠い無辜の民の上に起きる。中国文明のころから。

本来悪政を行うものにくだされるべき鉄槌は、常に無辜の人々に落ちる。

この世は地獄だ」

ドライバーも喜んでくれた。

「川辺、一緒に帰ろう」

樋田はそうすがった。

「いや、まだ仕事がある。

日の丸印でいいことなんか無い。それは親方日の丸になってしまう。

本当の日本の良さは、自由な世界に出てこそ際立つ。

それを海外にいて、特に思う」

川辺はそう続けた。

「私は特に、そのなかでも日本の鉄道が好きだ。

鉄道員の勤勉さ、実直さ、そして優しさが好きだ。

莫迦なメーカーは相変わらずそれを二束三文で悪しきものに売り飛ばす。

大事な守るべきものを守らず、どうしてもいい虚しいものばかり残そうとする。

本質を見る力のあるやつがずいぶん減った。真なるものが減り続けている。

樋田があともう1ダースいれば、受け継ぐべきものを受け継いで、日本の運命は違うのと思うよ」

被災地から脱出した。

ホテルで川辺は鉄道の話に来嶋から聞いた。

優しい口調は、鉄道をほんとうに愛しているんだなと思う。

その鉄道を守っている自分が嬉しくなるほど、来嶋は川辺の心に感じ入った。

空港での別れることになった。

「鉄道の別れとは違うけれど、別れは別れですね。

でも感じが違うのは、なんだか、線路でつながってないと思うからなんですか」

来嶋は、飛行機に乗るまでの宿で、たっぷり樋田と川辺に鉄道の話、それも運転甲組の話がまかれて、喉が痛むほど話した。

ふたりとも、本当に鉄道ファンなんだなと思える。

熱心に、まるで子供のように目を輝かせて聞いた。

それに答えないのは、来嶋にとっても、ありえないことだった。

来嶋もまた、鉄道員であり、鉄道を愛しているのだ。

搭乗案内放送が空港出発ロビーに流れた。

被災地から離れて無事だったこの南米の国際空港の大きな窓越しに、南米の夕陽がてりつけていた。

これから季節が逆の南米は寒くなっていく。

しかし、樋田と川辺の仲の熱さに、来嶋は深く胸をうたれた。

「また会えるさ。

真なるものだから。

その真なるものを、君に見たし、君を彼に見せたかった。

鉄道話を聞かせてやりたかった。

来島、君もまた真なるものだから」

来島は、深く肯き、言った。

「私も、そうありたいです」

樋田も頷いた。

ジェットの轟音が、また夕暮れの空に駆け登っていった。

<END TEXT>